

## エレミヤ書37-39章「真実に自分を救うもの」

### 1A 秘かに聞く者 37

1B 同意してもらいたい祈願 1-10

2B 預言者の幽閉 11-21

### 2A 自分を救わない者 38

1B 人間の怒り 1-13

1C 優柔不断の心 1-6

2C 義を行なう者 7-13

2B 人への恐れ 14-28

### 3A 最後に救われる者 39

1B 逃れられない裁き 1-10

2B 神の救い 11-18

## 本文

エレミヤ書 37 章を開いてください。私たちは、今日、ついにエルサレムの陥落に至るまでのところを読みます。エホヤキムの時代とゼデキヤの時代を行ったり来たりしていましたが、今回でついにエルサレムの町の包囲から陥落までを順を追って読むことになります。

### 1A 秘かに聞く者 37

1B 同意してもらいたい祈願 1-10

37:1 ヨシヤの子ゼデキヤは、エホヤキムの子エコヌヤに代わって王となった。バビロンの王ネブカデレザルが彼をユダの国の王にしたのである。37:2 彼も、その家来たちも、一般の民衆も、預言者エレミヤによって語られた主のことばに聞き従わなかった。

この二節で、これからの三章、いや 44 章までの言葉を全てまとめています。37 章から 39 章までがエルサレム陥落の話ですが、40 章から 44 章までがその後に僅かに残った民がエジプトに逃げ、そこで主の言葉に聞き従わなかったことを読みます。これが最も、人にとって悲劇なことです。この世においていろいろな災いがありますが、どんな災いよりも悲惨なのは、主を知らず、主の言葉に聞き従わないことです。

37:3 ゼデキヤ王は、シェレムヤの子エフカルと、マアセヤの子、祭司ゼパニヤを預言者エレミヤのもとに遣わして言った。「どうか、私たちのために、私たちの神、主に、祈ってください。」37:4 ..そのとき、エレミヤは民のうちに入りしっていて、まだ獄屋に入れられていなかった。37:5 パロの軍勢がエジプトから出て来たので、エルサレムを包囲中のカルデヤ人は、そのうわさを聞いて、エルサレムから退却したときであった。..

エレミヤ書 32 章で、従兄弟のハナムエルの土地をエレミヤが買い取った時、彼は監視の庭に監禁されていたのを読みました。けれどもこの時はまだ監禁されていませんでした。ですから、36 章は 32 章の前に起こった出来事です。またこの時は、パロの軍勢がエジプトから出てきた時でした。もう既に包囲は始まっていました。紀元前 588 年から始まります。けれどもエジプトのパロ・ホフラ（エレミヤ 44:30 参照）がユダに加勢するために出てきた時、バビロンはエジプトと戦うために一時、包囲を解除したのです。

この時に、ゼデキヤは自分の高官と祭司を遣わして、「私たちのために、どうか主に祈ってください。」と頼んだのです。もちろんこれは、バビロンから自分たちが救われるように祈ってくれ、ということなのです。包囲が解除された今、もしやこれが恒久的に続くのではないかという期待を抱いていたのです。祈りを人に頼むことは良いことです。ヤコブ書には「義人の祈りは働くと、大きな力があります。（ヤコブ 5:16）」とあります。けれども、「自分たちが願っていることがかなえられるように、どうか祈ってください。」と自分たちの願いに同意してもらった隠れた動機を、ゼデキヤの中に見ることができます。けれども聖書は、そのような祈りは聞かないと言っています。「願っても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。（ヤコブ 4:3）」とあります。まず自分自身が神の御心に服するからこそ、その祈りと願いは聞かれるのであって、それがなければ他人に祈ってもらっても意味がありません。

37:6 そのとき、預言者エレミヤに次のような主のことばがあった。37:7 「イスラエルの神、主は、こう仰せられる。『わたしに尋ねるために、あなたがたをわたしのもとに遣わしたユダの王にこう言え。見よ。あなたがたを助けに出て来たパロの軍勢は、自分たちの国エジプトへ帰り、37:8 カルデヤ人が引き返して来て、この町を攻め取り、これを火で焼く。』37:9 主はこう仰せられる。『あなたがたは、カルデヤ人は必ず私たちから去る、と言って、みずから欺くな。彼らは去ることはないからだ。37:10 たとい、あなたがたが、あなたがたを攻めるカルデヤの全軍勢を打ち、その中に重傷を負った兵士たちだけが残ったとしても、彼らがそれぞれ、その天幕で立ち上がり、この町を火で焼くようになる。』」

エレミヤは真っ直ぐ、主の御心を告げました。そして、主の御心はどんなことがあってもその通りになることを強調するために、重傷を兵士が負ったとしても、その兵士たちによってエルサレムの町は火で焼かれる、と言っています。主の御心は時には痛いのです。それは、私たちの心を刺すものかもしれません。けれども、主の真理を知る者は、誤った期待や偽りの希望を与えてはいけません。

## 2B 預言者の幽閉 11-21

37:11 カルデヤの軍勢がパロの軍勢の来るのを聞いてエルサレムから退却したとき、37:12 エレミヤは、ベニヤミンの地に行き、民の間で割り当ての地を決めるためにエルサレムから出て行った。37:13 彼がベニヤミンの門に来たとき、そこにハナヌヤの子シェレムヤの子のイルイヤと言う名の

当直の者がいて、「あなたはカルデヤ人のところへ落ちのびるのか。」と言って、預言者エレミヤを捕えた。37:14 エレミヤは、「違う。私はカルデヤ人のところに落ちのびるのではない。」と言ったが、イルイヤは聞かず、エレミヤを捕えて、首長たちのところに連れて行った。37:15 首長たちはエレミヤに向かって激しく怒り、彼を打ちたたき、書記ヨナタンの家にある牢屋に入れた。そこを獄屋にしていたからである。37:16 エレミヤは丸天井の地下牢に入れられ、長い間そこにいた。

時は、包囲が一時解除されていた時で、エレミヤがアナトテの町に戻ろうとした時です。32章に、従兄弟ハナムエルの土地を買い戻した話を思い出してください。彼は監視の庭において、その買い戻しの手続きをしましたが、この話しはその前に起こったことです。彼がアナトテの町に行こうとする時、北から出てベニヤミンの地に向かうベニヤミン門から出ようとしたところ、この出来事が起こりました。彼が、投降すれば生きることができると預言していたので、バビロンに投降する気だろうという嫌疑がかけられたのです。

ここからエレミヤの試練が始まります。これまでも、拘束されたことはありますが、バビロンによってエルサレムが滅ぼされる直前が最も激しい迫害を受けました。彼の監獄生活が始まります。使徒パウロも、その宣教の生活は獄中のものであったし、何よりも私たちの主は、カヤパ邸において死罪と宣言されてから、平手で殴られて、そして朝になるまでそこにある穴に入れられていました。「丸天井の地下牢」とありますが、たぶん似たようなものであったと思います。元々は貯水槽であったものです。岩を切り刻んで、奥深く掘ったものです。入口は小さいですが、中に入ればものすごく大きく、広いものが多いです。これを使って牢屋にしています。そこにある思いは、詩篇の中に数多く書かれていますが、それは暗闇であり、地の下にある陰府をも感じるような絶望感を言い表しているものが多いです。「詩篇 88:3-4 私のたましいは、悩みに満ち、私のいのちは、よみに触れていますから。私は穴に下る者とともに数えられ、力のない者のようにになっています。」

37:17 ゼデキヤ王は人をやって彼を召し寄せた。王は自分の家でひそかに彼に尋ねて言った。「主から、みことばがあったか。」エレミヤは、「ありました。」と言った。そして「あなたはバビロンの王の手に渡されます。」と言った。

主に対して祈ってほしいと願ったゼデキヤは、次は、「主から、みことばがあったか。」と言っていきます。しかしエレミヤは、多くのことを語りません。ただ、「ありました。・・あなたはバビロンの王の手に渡されます。」としか言いません。それもそのはず、彼は何度も語っているのですが、それでも主の言われることに聞いていないのですから、また尋ねてきたところで長く話しても、意味がありません。イエス様ご自身がそうでしたね、「ヨハネ 10:24-25 それでユダヤ人たちは、イエスを取り囲んで言った。「あなたは、いつまで私たちに気をもませるのですか。もしあなたがキリストなら、はっきりとそう言ってください。」イエスは彼らに答えられた。「わたしは話しました。しかし、あなたがたは信じないのです。わたしが父の御名によって行なうわざが、わたしについて証言しています。」それで、ユダヤ人による裁判においては、ほとんど話すことはなく、ヘロデの前では完全に口を閉じ

ておられましたし、ピラトの前でも寡黙でありました。もうすべてのことを語られ、神の御心を示していたのに、それに聞き従っていなかったからです。

37:18 エレミヤはゼデキヤ王に言った。「あなたや、あなたの家来たちや、この民に、私が何の罪を犯したというので、私を獄屋に入れたのですか。37:19 あなたがたに『バビロンの王は、あなたがたと、この国とを攻めに来ない。』と言って預言した、あなたがたの預言者たちは、どこにいますか。37:20 今、王さま、どうぞ聞いてください。どうぞ、私の願いを御前にながめて、私を書記ヨナタンの家へ帰らせないでください。そうすれば、私はあそこで死ぬことはないでしょう。」37:21 そこでゼデキヤ王は命じて、エレミヤを監視の庭に入れさせ、町からすべてのパンが絶えるまで、パン屋街から、毎日パン一個を彼に与えさせた。こうして、エレミヤは監視の庭にとどまっていた。

エレミヤは、王に二つのことを訴えています。一つは、自分は何も罪に値することを王や家来やユダの民にしていないこと。そしてもう一つが、偽預言者のことです。覚えているでしょうか、28章でハナヌヤという預言者が、ゼデキヤの治世の始めの時に、「二年のうちに、わたしは、バビロンの王のくびきを打ち砕く。(2-3 節参照)」とっていました。ハナヌヤは主に打たれて死にましたが、そのような預言者は今、どこにもゼデキヤのところにいないのです。非常に無責任な者たちです。偽預言者は、自分の語っている幸いな計画について、そのようにならなかつたら、その場からいなくなるか、無視します。幸いを預言していますが、そこには実は愛の欠片もありません。箴言に「友はどんなときにも愛するものだ。兄弟は苦しみを分け合うために生まれる。(17:17)」という言葉があります。エレミヤは後に、真の預言者としてエルサレム崩壊後もユダヤ人と共にいました。神の心を表しています。

そして、エレミヤが訴えたように、王は地下牢の穴から出させて、王宮の敷地内にある監視の庭に移しました。拘束はされていますが、はるかに自由のある環境です。そして、飢えることのないようにパン屋街から、パン一個のみを支給していました。これだけというのは苛酷ですが、けれどもバビロンに包囲されていた状況だったので、食料は枯渇していたのです。

## **2A 自分を救わない者 38**

### **1B 人間の怒り 1-13**

#### **1C 優柔不断の心 1-6**

38:1 さて、マタンの子シェファテヤと、パシュフルの子ゲダルヤと、シェレムヤの子ユカルと、マルキヤの子パシュフルは、すべての民にエレミヤが次のように告げていることばを聞いた。38:2 「主はこう仰せられる。『この町にとどまる者は、剣とききんと疫病で死ぬが、カルデヤ人のところに出て行く者は生きる。』そのいのちは彼の分捕り物として彼のものになり、彼は生きる。』38:3 主はこう仰せられる。『この町は、必ず、バビロンの王の軍勢の手に渡される。彼はこれを攻め取る。』」38:4 そこで、首長たちは王に言った。「どうぞ、あの男を殺してください。彼はこのように、こんなことばをみなに語り、この町に残っている戦士や、民全体の士気をくじいているからです。あの男は、

この民のために平安を求めず、かえってわざわいを求めているからです。」

首長たちが、エレミヤの言葉を聞きました。具体的な名前が書いてありますが、このことが歴史的な出来事であったことを明らかに示しています。エルサレムでダビデの町が発掘されている中で、印章が発掘されていますが、ここに出てきている二人の役人の名前、「パシュフルの子ゲダルヤ」と、「シェレムヤの子ユカル」の名が刻まれています。<sup>1</sup>エレミヤが、「この町にとどまる者は、剣とききんと疫病で死ぬ」と言っていました。これは包囲されているためにそうなります。飢饉は既に先に見るように起こっており、疫病は包囲で閉じ込められて、捨てるものも捨てられなくなって衛生状態が悪くなり、それで蔓延します。



彼らの怒りは、二つありました。「民全体の士気をくじいている」であります。皆で抵抗しているのに、投降しろと言っているのですから、裏切り行為です。もう一つは、「災いを求めている」ということでもあります。二つとも常識で考えたら、確かにその通りです。しかしエレミヤは、神の御心、霊的なことを語っています。御声を聞いていないということが最も悲惨なことであり、そのためには、神はこのような悪や不条理をお許しになるのです。

38:5 するとゼデキヤ王は言った。「今、彼はあなたがたの手の中にある。王は、あなたがたに逆らっては何もできない。」38:6 そこで彼らはエレミヤを捕え、監視の庭にある王子マルキヤの穴に投げ込んだ。彼らはエレミヤを綱で降ろしたが、穴の中には水がなくて泥があったので、エレミヤは泥の中に沈んだ。

ゼデキヤ王の言葉、「今、彼はあなたがたの手の中にある。」は全くの嘘であります。王であるなら、そこに神の恵みによって任された力があります。しかし、それを行使しないことは、まさに自分自身はその悪を行なっていることと同じです。イエス様のことを思い出さないでしょうか、ポンテオ・ピラトは、ユダヤ人の圧力によってイエス様を十字架刑に決めました。そして、「この人の血について、私には責任がない。自分たちで始末するがよい。(マタイ 27:24)」と言いましたが、それは大嘘です。彼は、イエスに罪がないことを知っていながら十字架刑の判決を下したのです。ローマの法の秩序をここで彼は壊したのです。

そして、監視の庭の中に、また元貯水槽に使っていた穴がありました。イスラエルは5月から10月までが乾季ですが、その時は雨がほとんど降らず、そして14章によると、主が裁きとして、ユダの地に雨を降らせておられなかったため、日照りが続いていたのだと思われます。それで底は水がなくなって、泥になっていました。ダビデの町では、1998年にエレミヤが閉じ込められた穴が見つかりました。王宮のあった敷地に小さな穴が見つかったので中に入ってみると、大きな地下室の

<sup>1</sup> <http://www.biblewalks.com/Sites/CityOfDavid.html#LargeStoneStructure>

ような空間がありました。まさに貯水槽です。当時と同じように、一部が依然として湿って泥になっていました。そして、もと水を入れていたところなので、泥になっていました。そしてそこに放っただけで、彼が飢え死にしてそのまま死に絶えるようにさせたのです。自分たちが殺したようには、はっきりさせたくなかったのでしょうか。しかし殺意ははっきりとしています。以前、ヨセフに対して兄が穴に入れましたが、そこにも殺意がありましたが、同じようにしました。

### 2C 義を行なう者 7-13

38:7 王宮にいたクシュ人の宦官エベデ・メレクは、エレミヤが穴に入れられたこと、また王がベニヤミンの門にすわっていることを聞いた。38:8 そこでエベデ・メレクは、王宮から出て行き、王に告げて言った。38:9 「王さま。あの人たちが預言者エレミヤにしたことは、みな悪いことばかりです。彼らはあの方を穴に投げ込みました。もう町にパンはありませんので、あの方は、下で、飢え死にしてください。」38:10 すると、王は、クシュ人エベデ・メレクに命じて言った。「あなたはここから三十人を連れて行き、預言者エレミヤを、まだ死なないうちに、その穴から引き上げなさい。」38:11 エベデ・メレクは人々を率いて、王宮の宝物倉の下に行き、そこから着ふるした着物やぼろ切れを取り、それらを綱で穴の中のエレミヤのところに降ろした。38:12 クシュ人エベデ・メレクはエレミヤに、「さあ、ふる着やぼろ切れをあなたのわきの下にはさんで、綱を当てなさい。」と言ったので、エレミヤがそのとおりにすると、38:13 彼らはエレミヤを綱で穴から引き上げた。こうして、エレミヤは監視の庭にすわっていた。

ここに、とても特徴のある人が登場します。「エベデ・メレク」ですが、その名の意味は「王のしもべ」です。そして彼は、クシュ人ではありますが、エチオピア人でもあります。今、イスラエルには黒人系のユダヤ人がいますが、彼らはシェバの女王とソロモン王の間にできた子の子孫であると主張します。これは定かではありませんが、女王シェバによってユダヤ人の信仰がもたらされたことは確かです。ここで、ユダの国でユダヤ人の王に仕えています。新約聖書にもエチオピアの宦官が出てきますね。彼はイザヤ書を読んでいるとき、ピリポの伝道によってイエス様を信じました(使徒8:26-40 参照)。

ユダヤ人ではなく、異邦人である彼が、率先して義の行ないをしたのです。ゼデキヤは相変わらず、言われたことだけに応じる、王の責任を放棄したような反応をしています。彼の決定は、最後に誰が何を言ったかによって全て決められていたようです。けれども、三十人を付けたというのは、エレミヤを引き出す時に反対派の者たちがやって来て阻止することのないようにするためでしょう。そしてエベデ・メレクは、物資も枯渇しているからなのではないでしょうか、古着やぼろ切れで綱を作り、エレミヤを救い出しています。彼の行なった正義こそ、憐れみに基づくものであり、本来は、王がしなければいけないことでした。虐げられている者を救うために裁きを行なうのが、王の務めであったはずですが、それを異邦人が行ないました。まさに、良きサマリア人の旧約版です。そして神は、そのことをまさに意図しておられるのだと思います。同胞のユダヤ人が助けない。しかし、主が同じユダヤ人を助けるのに、異邦人を用いられています。

## 2B 人への恐れ 14-28

38:14 ゼデキヤ王は人をやって、預言者エレミヤを自分のところ、主の宮の第三の入口に召し寄せた。王がエレミヤに、「私はあなたに一言尋ねる。私に何事も隠してはならない。」と言うと、38:15 エレミヤはゼデキヤに言った。「もし私があなたに告げれば、あなたは必ず、私を殺すではありませんか。私があなたに忠告しても、あなたは私の言うことを聞きません。」38:16 そこで、ゼデキヤ王は、ひそかにエレミヤに誓って言った。「私たちのこのいのちを造られた主は生きておられる。私は決してあなたを殺さない。また、あなたのいのちをねらうあの人々の手に、あなたを渡すことも絶対にしない。」38:17 するとエレミヤはゼデキヤに言った。「イスラエルの神、万軍の神、主は、こう仰せられる。『もし、あなたがバビロンの王の首長たちに降伏するなら、あなたのいのちは助かり、この町も火で焼かれず、あなたも、あなたの家族も生きのびる。38:18 あなたがバビロンの王の首長たちに降伏しないなら、この町はカルデヤ人の手に渡され、彼らはこれを火で焼き、あなたも彼らの手からのがれることができない。』」

これが、記録されているゼデキヤとエレミヤの最後の会見となります。バビロンに降伏するという主の御心を聞くことが、もはや命がけとなってしまいました。王が聞いていると言うこと自体も、本来会ってはならないのですが、命がけになっています。そしてエレミヤも、真実を語れば、これ以上生きることはできないのではないかとということです。ゼデキヤの、神の言葉を聞きたいという熱意はものすごく伝わってきます。そして、それを聞くために、また神の預言者を守るために神に誓ってさえいます。ここまで、王は真実を知りたいと願っているのに、それでもその真理に従って行動することをためらったのか、次に書いてあります。

38:19 しかし、ゼデキヤ王はエレミヤに言った。「私は、カルデヤ人に投降したユダヤ人たちを恐れる。カルデヤ人が私を彼らの手に渡し、彼らが私をなぶりものにするかもしれない。」38:20 エレミヤは言った。「彼らはあなたを渡しません。どうぞ、主の声、私があるに語っていることに聞き従ってください。そうすれば、あなたはしあわせになり、あなたのいのちは助かるのです。」

主がここで語られていることは、基本的に後に、弟子たちになが語られたことと同じであります。「いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。(マルコ 8:35)」ゼデキヤは、既に捕囚の民となったユダヤ人のところで、ゼデキヤに敵対している者たちがいて、彼らが自分を罅り者にするだろうということです。自分がそうなりたくない、命が救われたいと思ったのです。しかし、エレミヤは、そうではない、その反対であるということを言っています。投降するということは、自分のこれまでの生きるという生存本能に反することです。いくらでも、殺されてしまう危険はあります。しかし、神は降伏することによってむしろ、彼らが生きるように意図しておられました。それは、彼らを救いたいと願われている神の憐れみであり、神は、自分に死ぬ者を生かし、自分を救おうとしてご自身を拒む者を滅ぼされるからです。ですから、これは主に救いを信頼するかどうか、という問題であります。

38:21 しかし、もしあなたが降伏するのを拒むなら、これが、主の私に示されたみことばです。  
38:22 『見よ。ユダの王の家に残された女たちはみな、バビロンの王の首長たちのところに引き出される。聞け。彼女らは言う。・あなたの親友たちが、あなたをそそのかし、あなたに勝った。彼らはあなたの足を泥の中に沈ませ、背を向けてしまった。38:23 あなたの妻たちや、子どもたちはみな、カルデア人のところに引き出され、あなたも彼らの手からのがれることができずに、バビロンの王の手に捕えられ、この町も火で焼かれる。』

王の家に残された女たちが、ゼデキヤ王のしたことの愚かさを語るという預言です。一つに、「あなたの親友たちが、あなたをそそのかす、であります。先の話です、ゼデキヤはそれほど恐れていた側近の者たち、また預言者たちが、ただ自分を唆していたのだということに気づきます。そして、もう一つが、「彼らはあなたの足を泥の中に沈ませ、背を向けてしまった。」であります。エレミヤを泥の中に沈ませましたが、今度は、自分自身がそのように穴の中に入ってしまうような経験をするということです。そして、彼自身とその家族はバビロンに捕え移され、エルサレムの家々も火で焼かれてしまいます。

38:24 ゼデキヤはエレミヤに言った。「だれにも、これらのことを知らせてはならない。そうすれば、あなたは殺されることはない。38:25 もし、あの首長たちが、私とあなたと話したことを聞いて、あなたのところに行き、あなたに『さあ、何を王と話したのか、教えてくれ。私たちに隠すな。あなたを殺しはしない。王はあなたに何を話したのだ。』と言っても、38:26 あなたは彼らに、『私をヨナタンの家に返してそこで私が死ぬことがないようにしてくださいと、王の前に嘆願していた。』と言いなさい。」38:27 首長たちがみなエレミヤのところに来て、彼に尋ねたとき、彼は、王が命じたことばのとおり、彼らに告げたので、彼らは黙ってしまった。あのことはだれにも聞かれなかったからである。38:28 エレミヤは、エルサレムが攻め取られる日まで、監視の庭にとどまっていた。彼はエルサレムが攻め取られたときも、そこにいた。

王は王らしい、エレミヤを守る方法を彼に伝授しました。ヨナタンの家とは、37章において地下牢に入れられていたそのヨナタンの家のことです。そこには戻りたくないという話にしておきなさい、ということです。エレミヤも戻りたくないでしょう、ですから嘘をつく訳ではありません。エレミヤはその言葉を守りました。そして、彼は最後の最後までその監視の庭にいて、そこでユダヤ人からの危害から守られていたのです。

ゼデキヤは、ここまでのことをしたのに、なぜ、降伏しなさいということに従えなかったのでしょうか？それが午前礼拝で話したことです、人を恐れていました。恐れということが、いかに私たちが神を信じ、神に頼る妨げになっているかを知りました。恐れとは、言い換えれば、自分を守っておきたいというプライド、高慢の現われでもあります。言い換えれば、信じるとは、自分から離れて、神に明け渡すことであります。

### 3A 最後に救われる者 39

そして 39 章は、実際にバビロンが攻めてくる場面を読みます。

#### 1B 逃れられない裁き 1-10

39:1 ユダの王ゼデキヤの第九年、その第十の月に、バビロンの王ネブカデレザルは、その全軍勢を率いてエルサレムに攻めて来て、これを包囲した。39:2 ゼデキヤの第十一年、第四の月の九日に、町は破られた。

イスラエルにとって、この期日は最も衝撃的な日の一つであります。第十の月第九年に包囲が始まりましたが、列王記第二 25 章では「十日」と、日付までが記されています、588 年 1 月 15 日です。そして、第十一年の第四の月の九日は 586 年 7 月 18 日です。30 か月以上の包囲でした。そしてユダヤ人は、「ティシュア・ベ＝アブ(השבת באב)」という神殿破壊の記念日として守られています。アブの月の九日という意味です。これがなんと、紀元 70 年に起こったローマによるエルサレムの神殿破壊もアブの九日であったということです。

39:3 そのとき、バビロンの王のすべての首長たちがはいて来て、中央の門に座を占めた。すなわち、ネルガル・サル・エツェル、サムガル・ネブ、ラブ・サリスのサル・セキム、ラブ・マグのネルガル・サル・エツェル、およびバビロンの王の首長の残り全員である。

「中央の門」というのは、おそらく北側の城壁のほうにある、中央の谷、チロペオンの谷のところにあつたのではないかと思います。しばしば、エルサレムの「広い壁」と呼ばれる高さ八メートルあつたと言われている遺跡の辺りがそれではないかと言われています。そこを占拠して、もはやエルサレムはダビデ家ではなくバビロンが実効支配していることを示したのでしょう。

39:4 ユダの王ゼデキヤとすべての戦士は、彼らを見て逃げ、夜の中に、王の園の道伝いに、二重の城壁の間の門を通過して町を出、アラバへの道に出た。39:5 しかし、カルデアの軍勢は彼らのあとを追い、エリコの草原でゼデキヤに追いつき、彼を捕えて、ハマテの地のリブラにいるバビロンの王ネブカデレザルのもとに連れ上った。そこで、王は彼に宣告を下した。

彼らは逃げました。「王の園の道伝い」とありますが、これはおそらくシロアムの池の辺りにあつたのではないかと思います。そこからケデロンの谷に簡単に行けて、そしてユダの荒野の溪谷を下っていき、アラバというのはヨルダン溪谷のことですが、そちらにいて、おそらくアモン辺りに亡命しようと思ったのでしょう。しかし、ヨルダン川を渡河することはできず、エリコの草原で捕まりました。そして、シリアにあるリブラというところで、ネブカデレザルと目と目を合わせます。神が前にエレミヤを通して言った通りです。

39:6 バビロンの王はリブラで、ゼデキヤの子たちをその目の前で虐殺し、またユダのおもだつた

人たちもみな虐殺し、39:7 ゼデキヤの両眼をえぐり出し、彼を青銅の足かせにつないで、バビロンに連れて行った。39:8 カルデヤ人は、王宮も民の家も火で焼き、エルサレムの城壁を取りこわした。39:9 侍従長ネブザルアダンは、町に残されていた残りの民と、王に降伏した投降者たちと、そのほかの残されていた民を、バビロンへ捕え移した。39:10 しかし侍従長ネブザルアダンは、何も持たない貧民の一部をユダの地に残し、その日、彼らにぶどう畑と畑を与えた。

ゼデキヤに対して、ネブカデネザルの怒りは相当なものでした。息子たちを虐殺して、そしてゼデキヤを唆した首長たちも虐殺しました。それから彼の目を抉り出します。これは、目で見た最後の記憶が息子の死であることを焼きつけるためです。それから、エレミヤの預言通りに、王宮も家々も火で焼かれます。これもまた、今、ダビデの町の遺跡の中に焼けた家の遺跡が発掘されています。そして、他の残された民を連れて行き、ただ、エルサレムの事後処理のために残しているカルデヤ人の兵のためでしょうか、食糧を与えるためにぶどう畑と畑を、貧民の一部に渡して任せました。

## 2B 神の救い 11-18

39:11 バビロンの王ネブカデレザルは、エレミヤについて、侍従長ネブザルアダンに次のように命じた。39:12 「彼を連れ出し、目をかけてやれ。何も悪いことをするな。ただ、彼があなたに語るとおりに、彼にせよ。」39:13 こうして、侍従長ネブザルアダンと、ラブ・サリスのネブシャズ・バンと、ラブ・マクのネルガル・サル・エツェルと、バビロンの王のすべての高官たちは、39:14 人を遣わして、エレミヤを、監視の庭から連れ出し、シャファンの子アヒカムの子ゲダルヤに渡して、その家に連れて行かせた。こうして彼は民の間に住んだ。

ネブカデレザルは、おそらくエレミヤの預言を聞いていたのでしょう。彼は反逆していないことは明らかでした。それで、彼は解放させています。そしてエレミヤは続いて、ごくわずか残っているユダヤ人たちと住むこととなります。これで、主がエレミヤを若い時に召された時の言葉が成就しました。「見よ。わたしはきょう、あなたを、全国に、ユダの王たち、首長たち、祭司たち、この国の人々に対して、城壁のある町、鉄の柱、青銅の城壁とした。だから、彼らがあなたと戦っても、あなたには勝てない。わたしがあなたとともにいて、..主の御告げ。..あなたを救い出すからだ。(1:18-19)」召されたのが、紀元前 640 年でしたので、なんと 54 年後にこの約束がその通りになったのです。エレミヤの忠実な奉仕の務めが、ここにあります。そしてそれ以上に、主ご自身が約束を守る方が分かることです。そしてもう一人、主が忠実な僕を救う約束を与えられます。

39:15 エレミヤが監視の庭に閉じ込められているとき、エレミヤに次のような主のことばがあった。39:16 「行って、クシュ人エベデ・メレクに話して言え。『イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。見よ。わたしはこの町にわたしのことばを実現する。幸いのためではなく、わざわいのためだ。それらは、その日、あなたの前で起こる。39:17 しかしその日、わたしはあなたを救い出す。..主の御告げ。..あなたはあなたが恐れている者たちの手に渡されることはない。39:18 わ

たしは必ずあなたを助け出す。あなたは剣に倒れず、あなたのいのちはあなたの分捕り物としてあなたのものになる。それは、あなたがわたしに信頼したからだ。・・主の御告げ。・・』」

エレミヤを穴の中から救い出したエベデ・メレクも、エレミヤと同じように自分の命を分捕り物とすることができます。彼の恐れは、ユダヤ人の首長たちでした。彼らがエレミヤを自分が助けたことによって、自分に危害を与えるのではないかと恐れたのです。けれども、主が「その者たちの手に渡されることはない」と確約してくださいました。

そして最後の言葉が最も大事です。「それは、あなたがわたしに信頼したからだ。」であります。私たちは絶えず、主を信頼するところにある自分のプライドとの戦いがあります。自分を守ろうとする力があると、それはかえって滅びを招きます。しかし主に信頼すれば、人を恐れる自分の肉との戦いがあります。しかしそれでも、神の約束にすがって信頼するのです。「私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。(ヘブル 10:39)」そうすれば、エベデ・メレクと同じように、その時に正義を行なう力が与えられます。聖霊の力がその時に備えられるのです。聖霊に導かれていきたいですか？そこには、自分で何とかしなければいけないという肉の行ないの誘惑を避けて、ただ主に信頼する信仰が必要です。